



水戸市男女平等参画基本条例の啓発と
男女平等参画社会の形成と促進のために

WAVE

第13号

発行日：平成 27 年 10 月 31 日
発行：特定非営利活動法人
M・I・T・O 21
〒310-0851 水戸市千波 508-34
発行責任者：黒澤輝子

琵琶、尺八で奏でる男女平等参画セミナー

9月 は水戸市男女平等参画推進月間です 会場：みと文化交流プラザ5F 研修室



9月6日(日)講師に尺八・琵琶奏者の長須与佳さんを迎えて、古典音楽を伝えていく中での男女平等と次世代につなぐ実践の話、尺八・琵琶の演奏をしていただきました。長須さんは、女性にはまだまだ門戸の狭いといわれている邦楽の世界に飛び込み、現在文部科学省の事業として、全国の小中学校を訪れ、日本古来の音楽を広める活動もされております。

お話は尺八の演奏とともに

明治以降、西洋音楽を中心に進められてきた結果、音楽の授業で邦楽は現在の小中学校の教科書には1ページくらいしか載っていないのが現状です。最近の教科書からは童謡唱歌もどんどんカットされ、情操教育の中でも日本の原風景的なものが消えつつあるのです。

長須さんは、次の世代に伝えていくことと同時に、結婚を機に活動から遠ざかってしまう女性奏者たちへの道筋をつけたいと力強い言葉がありました。ご自身は、夫君の強力な後押しで活動を続けることができるというワークライフバランスの話からも、厳しい現状を乗り越えられ、前進するすばらしい生き方をうかがい知ることができました。

また、現代風に作曲されて尺八のイメージが身近なものになったり、琵琶の伝わってきた道シルクロードが、浮かんでくるような曲などの演奏もあり、参加者の多くがもっと彼女を応援したいとの感想を寄せてくれ、企画した私たちも、ヒューマンライフシンポジウムを控えた多忙な中で、別な空間に浸り心洗われるひとときでした。最後に、長須さんが作曲された、朝井まかてさんの「恋歌」の主人公の中島歌子を詠んだ幻の琵琶歌をご披露いただきました。(兼子千恵子記)



長須さん琵琶生演奏

萩の谷中島歌子刀自(二十年祭記念琵琶歌)抜粋 三宅花圃作詞

逸せる者は其声楽しみ、怨あるものは其声悲しむ。天地を動かし鬼神泣く、言葉の花の花蕊、萩の錦のをりをりに、睦び合こそ楽しけれ。

中島刀自は御弟子達あまた集へてさらぬだに風にも堪えぬいと柳、思い出の糸くりかえししのび給うも涙なり。頃は万延元年春三月、御雛様の前に遊んで居らるゝ時、門前俄かに騒がしく、井伊掃部頭を水戸浪士が、斬ったやっという噂、はっと胸にこたえたは、夫林忠右衛門、勤王の志あつく同志の士と事を行なわんず計画の由、若しやと思へば気もそぞろ、幸い玄関に脱ぎ捨ての饅頭笠赤合羽、しばし借用と身を覆ひ安藤坂から一散に桜田門さして駆け出したり。堀端にさしかり血塗れの人影は蓮田市五郎、蓮田様と走せ寄りたいのを、其儘かけぬけ必ず此の先に夫忠衛門も、生死いづれと落ち散る刀鞘にも気をつけて八重洲河岸に着きにけり。以下省略

— 祐功の館を見学して —

日時：平成 27 年 6 月 19 日(金)

この春飯島町にオープンした特別養護老人ホーム「祐功の館」を見学する機会がありました。明るく機能的で清潔感にあふれる館内と、入居者の生活を丸ごと引き受けて、目配り気配りを効かせた職員の方々の働く姿が印象的でした。施設長さんのお話からも、日夜入居者の安全な時間と空間を守り、安心できる生活の場を提供することに使命感を持って腐心しておられるのが伝わってきました。



随所に工夫された施設内を見学

さて団塊の世代が数年後に 70 代を迎える昨今、親の老後を模索しながらも自らの老後も視野に入ってきます。今年 100 歳以上が 6 万人を超え、75 歳以上は 2015 年 13%、2050 年には 24%との報道が敬老の日にありました。私たちはこれからの時間を意思を持っていかに過ごすか悩ましいところです。

心の深層は人それぞれですが、この先自宅にいても施設での生活を選んでも自分の人生。今もこれからも続く自分の人生です。施設へ入居を寂しいと思うか、それとも煩わしいことや面倒な人間関係から解放されて自立と自律の生活に快適さを感じるかは本人の気持ち次第でしょう。

施設に自分の生活を委ねたとしても、人の手を借りながら過ごすゆったりとした充足感や忙しく暮らした来し方とは違う趣きや味わいの生活があるはずです。



緑豊かな自然を眺める広い窓辺

入居直後は、職員からの声かけや計算された食事、それに他の入居者との交流がプラスに働いて、以前より元気になる人がほとんどと言われておりますので、順応性も大切と思います。歳を重ねるといことは、身体的不自由や脳の健康の心配も出てきます。その延長上に自宅での生活にサポートが必要になったり、さらに先の見えない長期にわたる介護になれば、家族のやさしさと思いやりにも限度があるでしょうし、一方本人は家族への負担が増えるのを心苦しく思うに違いありません。

どこで暮らしていようと自分に与えられた時間を自分で選んだ場所で静かに威厳をもって生きている人は魅力的です。嬉しいことに今は以前より選択肢が増えています。

人生の終盤を費やすに値する穏やかな生活環境や安らぎが施設への入居という形の共同生活の中にもあると「祐功の館」を見学して感じました。

国の福祉への方針や法律も介護保険の扱いも時と共に変化するの、情報を集めて考えておくのが賢明と思います。時を惜しみつつ、急ぎつつ元気なうちに。(田山和子)

=大人の社会科見学 2015=

日時 平成 27 年 7 月 16 日 (木)

昨年よりモノづくりの現場を見学しようと大人の社会科見学を企画、茨城県五霞町のキューピー、ヤクルトの 2 工場に行ってきました。一日雨模様の中の見学でした。

18 世紀半ばにスペインのメノルカ島の港町マオンで美味しいソースがあって、それが「マオンのソース」としてパリで広まり「マヨネーズ」となった。これが最も有力な起源と言われ、その約 160 年後、アメリカで缶詰の勉強に来ていた日本人中島董一郎氏が野菜サラダを食べる食文化とマヨネーズに出会ったのです。帰国後日本人の体格向上を願い 1925 年 3 月に日本初の誰にも愛される商品「キューピーマヨネーズ」は生まれました。

関東大震災後の復興をきっかけに西洋の食文化が広まり、1941 年には年間出荷量は約 500 トンまで伸びたものの戦争により、原料入手が困難になり、中断。終戦後 3 年目 1948 年の製造を再開しました。

キューピーは「工場は家庭の台所の延長」と考えて「オープンキッチン」をテーマに 1961 年より工場を公開しています。工場見学のメインは割卵スピード 1 分間に 600 個の卵を割る割卵機。自動的に卵黄と卵白に分けることもでき、割卵機は 2 時間ごとに洗浄されます。卵殻の膜は化粧品や食品原料、卵殻粉はカルシウム強化食品、チョコレート、土壌改良材、スタットレスタイヤなどに生まれ変わります。キューピーが一年に使う卵は 25 万トン!!日本の年間生産量の 10%を占めるそうです。

キューピーは 2002 年から「食育」食の楽しさ、大切さを伝えるマヨネーズ教室を小学生対象に開催、**環境**への取り組みは商品製造からユーザーへ届くまでの環境への負荷を減らす配慮に努めており、**社会**との関わりはベルマーク運動や、フードバンク、環境団体への寄付を支援するマッチングギフト、「全日本お母さんコーラス大会」の協賛、家族の笑顔と健康を支え、日頃家事や仕事で忙しいお母さんを応援してくれています。



「すべての人の健康を願って」生まれた「ヤクルト」=健康なカラダ作りに生かすプロバイオティクス(生きたまま腸内にとどく有用菌のチカラを健康増進に役立てようとする考え方)のパイオニアとして、世界中の人々に愛される乳飲料の製造工場を見学。

ヤクルト茨城工場では原料の仕込みから、培養、調合、容器の成形、充填、包装、出荷までの一貫した生産システムを「ISO9001」の認証を取得、衛生管理は「HACCP」の導入により、厚生労働大臣から「総合衛生管理製造過程」の承認を受けています。また環境配慮の取組として「ISO14001」の認証取得に取り組んでおり、工場廃棄物を可能な限り再資源化し、省エネルギーにも努め、CO₂の排出抑制を進めていて、排水処理ではヤクルト容器を利用した A&G 水浄化システムを導入しています。

ヤクルトは健康に有効な様々な素材の研究・開発を基盤として、食品事業、化粧品事業、医薬品事業を展開するとともに、社会の一員として、社会活動にも努めています。

ヤクルトレディによる宅配は、健康に良い乳酸菌を普及するために生まれた、ヤクルト独自の販売方法、平成 26 年 3 月末では全国約 4 万人、子育て中のママや介護で悩む家族を温かく見守り、ふれあい、真心こめて商品を届けています。社員を大切にせる企業として女性の健康を願い、ピンクリボン運動も実施しており、水戸では千波湖畔を 11 月 3 日にピンクリボンウォークを行っています。

『ママの癒し空間 ヨガを通して伝えたかった事』 ヨガインストラクター 鬼沢 由紀

私が、ヨガを始めたきっかけは、仲良くなったばかりの方がヨガ教室に通っていて、「その方ともっと仲良くなれたら…」という思いからでした。現在、インストラクターとしてヨガを伝えていますが、その時の私は、まさかここまでヨガを好きになるとは思ってもいませんでした。それまでの私は、ヨガという言葉は聞いたことはあったのですが、「身体が柔らかい人がやるもの」という思い込みがあり、身体が硬い私はヨガに行っても恥ずかしい思いをするだけではと行くのを遠慮していたのです。しかし、「身体が硬くても大丈夫！動いた後はすごくスッキリして心地いいよ！」という言葉聞き、思い切って行ってみることにしました。

初めてレッスンを受けた時は、レッスン前は緊張でしたが、始まってみると無心になれて、終わった後の爽快感が言葉通り心地よく感じられ、すぐにその魅力に惹かれ教室に通い始めました。

ヨガは体が硬くても、自分のペースで出来るので、ゆっくりと自分の身体と向き合い、ポーズを深めていけるという事。続けることで柔軟性が高まり、捻挫などをしにくくなり、代謝も上がるため、太りにくくなる事。嫌な事があっても、ヨガをしている時は無心になれるので、ストレス解消になる事。また、通っているうちにヨガを通してお友達も出来、良いことづくめでした。

今回、ママの癒し空間のヨガを通して、参加して頂いた方々に少しでも私が感じた様な心地よさを味わって頂けたらと思い、みなさんとレッスンをした時間は、とても楽しいひとときでした。



参加者の方から、「心地よかった！」というお言葉も頂き、その言葉を聞くことで、嬉しさとともに、インストラクターをしていて良かったと心が温くなりました。

とても素敵な方ばかりで、ヨガを通して出会いの場を設けて頂いた事に感謝しております。これをきっかけにヨガに興味を持って頂けたら幸いです。また皆様とお会いできる日を楽しみにしております。

新会員紹介 よろしくお申し上げます。

「日本女性会議 2001 ひと」の実行委員として参加させていただいてから 15 年、夜を徹して作業をしたお仲間の方々と、再び一緒に活動できますこと、大変嬉しく思います。

部会でご指導頂いた茨大の長谷川先生が会議終了後、「男女平等参画基本条例も制定され進路も決まった、水戸市の女性運動や政策、この会議に参画した団体・個人がどう帆を揚げられるだろうか」と問いかけられました。案じるまでもなく、実行力のある有志により、ポスト日本女性会議 2001 ひとから団体が誕生し、NPO 法人の認証を受け、行政との協働を語りながら行動力と熱意で発展されている様子を知り、此度お仲間に入れていただきました。めざすものは変わらず、変わりつつある社会の課題と向き合いながら、次の世代につないでいける誰もが参加可能な活動の有り様に見出していきたいと思っております。小林弘子

素敵な方々の集まりで楽しいから入らない？」と井川さんが誘って下さり、入会させていただきました。私は「精神障害・知的障害のある人たちと明るく楽しく暮らす」をモットーに日本で一番小さいであろう NPO 法人を運営しています。どうぞよろしくお願いいたします。並木つぎ子

編集後記：今年度は子育て世代の若いパパママの参加を夏休みに企画して、会員の知人・友人に声かけ、みと文化交流プラザの調理室が熱気にあふれました。今若い家族は夫婦単位で子どもの養育や家事もしっかり分担しています。熟年世代の方が介護や老い支度の話には男女格差があるような気がします。会員自ら自己啓発に努めていきたいです。あっという間に新しい一年がすぐそこに(事務局)